

少年

芥川龍之介

青空文庫

一 クリスマス

今年のクリスマスんぱしゆきの午後、堀川保吉ほりかわやすきちは須田町すだちようの角かどから新橋行しんぱしゆきの乗合自動車に乗った。彼の席だけはあつたものの、自動車の中はあいかわらず不変身動きさえ出来ぬ満員である。のみならず震災後の東京の道路は自動車おとを躍らすことも一通りではない。保吉はきょうもふだんの通り、ポケットに入れてある本を出した。が、鍛冶町かじちようへも来ないうちにととう読書だけは断念した。この中でも本を読もうと云うのは奇蹟きせきを行うのと同じことである。奇蹟は彼の職業ではない。美しい円光を頂いた昔の西洋の聖しやうじや者な

るものの、——いや、彼の隣りにいるカトリック教の宣教師は目前に奇蹟を行つてゐる。

宣教師は何ごとくも忘れたように小さい横文字の本を読みつづけている。年はもう五十を越しているのであろう、鉄縁てつぶちのフランス・ネエをかけた、鶏のように顔の赤い、短い頬鬚ほおひげのある仏蘭西人である。保吉は横目を使いながら、ちよつとその本を覗きこんだ、*Essai sur les* ……あとは何だか判然しない。しかし内容はともかくも、紙の黄ばんだ、活字の細かいこま、とうてい新聞を読むようには読めそうもない代物しろものである。

保吉はこの宣教師に軽い敵意を感じたまま、ぼんやり空想ふけに耽り出した。——大勢の小天使は宣教師のまわりに読書の平安を護まも

つている。勿論もちろん異教徒たる乗客の中には一人も小天使の見えるものはない。しかし五六人の小天使は鍔つばの広い帽子の上に、逆さ立ちかたをしたり宙返りめじろをしたり、いろいろの曲芸を演じている。と思うと肩の上へ目白押めじろしに並んだ五六人も乗客の顔を見廻しながら、天国の常じょうだん談を言い合っている。おや、一人の小天使は耳の穴の中から顔を出した。そう云えば鼻柱の上にも一人、得意そうにパンス・ネエまたがに跨またっている。……

自働車の止まったのは大伝馬町おおでんまちようである。同時に乗客は三四人、一度に自働車を降りはじめた。宣教師はいつか本を膝ひざに、きよろきよろ窓の外を眺めている。すると乗客の降り終るが早いか、十一二の少女が一人、まっ先に自働車へはいつて来た。褪たいこうしよ紅

色くの洋服に空色の帽子ぼうしを阿弥陀あみだにかぶった、妙なまいきに生意氣しんちゆうらしい少女である。少女は自働車のまん中にある真しんちゆう鍬くわの柱につかま
ったまま、両側の席を見まわした。が、生憎あいにくどちら側にも空あ
ている席は一つもない。

「お嬢さん。ここへおかけなさい。」

宣教師は太い腰を起した。言葉はいかにも手に入った、心もち
鼻へかかる日本語である。

「ありがとう。」

少女は宣教師と入れ違いに保吉の隣りへ腰をかけた。そのまた
「ありがとう」も顔のように小こましやくれた抑揚よくように富とみんでいる。
保吉は思わず顔をしかめた。由来子供は——殊ぜんに少女は二千年前

の今月今日、ベツレヘムに生まれた赤児あかごのように清浄無垢しやうじしやうむくのものと信じられている。しかし彼の経験によれば、子供でも悪党わげのない訣わけではない。それをことごとく神聖がるのは世界に遍満へんまんしたセンチメンタリズムである。

「お嬢さんはおいくつですか？」

宣教師は微笑びしょうを含んだ眼のぞに少女の顔を覗きこんだ。少女はもう膝の上に毛糸の玉を転がしたなり、さも一かど編めるように二本の編み棒を動かしている。それが眼は油断なしに編み棒の先を追いつながら、ほとんど媚こびを帯びた返事をした。

「あたし？ あたしは来年十二。」

「きようはどちらへいらつしやるのですか？」

「きょう？ きょうはもう家へ帰る所なの。」

自働車はこう云う問答の間に銀座の通りを走っている。走っていると云うよりは跳ねていると云うのかも知れない。ちようど昔ガリラヤの湖にあらしを迎えたクリストの船にも伯仲するかと思ふくらいである。宣教師は後ろへまわした手に真鍮の柱をつかんだまま、何度も自働車の天井へ背の高い頭をぶつけそうになった。しかし一身の安危などは上帝の意志に任せてあるのか、やはり微笑を浮かべながら、少女との問答をつづけている。

「きょうは何日だか御存知ですか？」

「十二月二十五日でしょう。」

「ええ、十二月二十五日です。十二月二十五日は何の日ですか？」

お嬢さん、あなたは御存知ですか？」

保吉はもう一度顔をしかめた。宣教師は巧みにクリスト教の伝道へ移るのに違いない。コオランと共に剣を執とったマホメツト教の伝道はまだしも剣を執った所に人間同士の尊敬なり情熱なりを示している。が、クリスト教の伝道は全然相手を尊重しない。あたかも隣りに店を出した洋服屋の存在を教えるように慇いんぎん懃にんに神を教えるのである。あるいはそれでも知らぬ顔をする、今度は外国語の授業料の代りに信仰を売ることを勧すすめるのである。殊に少年や少女などに画本えほんや玩具がんぐを与える傍ら、ひそかに彼等の魂を天国へ誘拐しようとするのは当然犯罪と呼ばれなければならぬ。保吉の隣りにいる少女も、——しかし少女は不相あいかわらず変編みもの

手を動かしながら、落ち着き払った返事をした。

「ええ、それは知っているわ。」

「ではきようは何の日ですか？ 御存知ならば云つて御覧なさい

。」

少女はやつと宣教師の顔へみずみずしい黒眼くろめが勝ちの眼を注いだ。

「きようはあたしのお誕生たんじょうび日。」

保吉は思わず少女を見つめた。少女はもう大真面目おおまじめに編み棒の

先へ目をやっていた。しかしその顔はどう云うものか、前に思っ

たほど生意気ではない。いや、むしろ可愛い中にも智慧ちえの光りの

遍へんしやう照した、幼いマリアにも劣らぬ顔である。保吉はいつか彼

自身の微笑しているのを発見した。

「きようはあなたのお誕生日！」

宣教師は突然笑い出した。この仏蘭西人の笑う様子ようすはちようど人の好いお伽とぎばなし噺ばなしの中の大男か何かの笑うようである。少女は今度はげんそうに宣教師の顔へ目を挙げた。これは少女ばかりではない。鼻の先にいる保吉を始め、両側の男女の乗客はたいいてい宣教師へ目をあつめた。ただ彼等の目にあるものは疑惑でもなければ好奇心でもない。いずれも宣教師の哄こうしやう笑しょうの意味をはつきり理解した頬笑みほほえみである。

「お嬢さん。あなたは好い日にお生まれなさいましたね。きようはこの上もないお誕生日です。世界中のお祝いするお誕生日です。あなたは今に、——あなたの大人おとなになった時にはですね、あなた

はきつと……」

宣教師は言葉につかえたまま、自働車の中を見廻した。同時に保吉と眼を合わせた。宣教師の眼はパンス・ネエの奥に笑い涙をかがやかせている。保吉はその幸福に満ちた鼠ねずみいろ色の眼の中にあらゆるクリスマススの美しさを感じた。少女は——少女もやつと宣教師の笑い出した理由に気のついたのである、今は多少拗すねたようにわざと足などをぶらつかせている。

「あなたはきつと賢かしこい奥さんに——優しいお母さんにおなりなさるでしょう。ではお嬢さん、さようなら。わたしの降りる所へ来ましたから。では——」

宣教師はまた前のように一同の顔を見渡した。自働車はちよう

ど人通りの烈しい尾張町おわりちようの辻に止まっている。

「では皆さん、さようなら。」

数時間の後のち、保吉はやはり尾張町のあるバラックのカフェの隅にこの小事件を思い出した。あの肥ふとった宣教師はもう電燈もともり出した今頃、何をしていることであろう？ クリストと誕生日を共にした少女は夕飯ゆうはんの膳ぜんについた父や母にけさの出来事を話しているかも知れない。保吉もまた二十年前ぜんには娑婆苦しやばくを知らぬ少女のように、あるいは罪のない問答の前に娑婆苦を忘却した宣教師のように小さい幸福を所有していた。大徳院だいとくいんの縁日えんにちに葡萄餅どうもちを買ったのもその頃である。二州楼にしゅうろうの大広間に活動写真を見たのもその頃である。

「本所ほんじよふかがわ深川はまだ灰の山ですな。」

「へええ、そうですね。時に吉原よしわらはどうしたんでしよう？」

「吉原はどうしましたか、——浅草あさくさにはこの頃お姫様のいんばい姪売いんばいが出るでと云うことですか。」

隣りのテエブルには商人が二人、こう云う会話をつづけている。が、そんなことはどうでも好い。カフェの中央のクリスマス木は綿をかけた針葉しんようの枝に玩具おもちゃのサンタ・クロオス達の銀の星だのをぶら下げている。瓦斯ガス煖炉だんろの炎も赤あかとその木の幹を照らしているらしい。きようはお目出たいクリスマスである。「世界中のお祝するお誕生日」である。保吉は食後の紅茶を前に、ぼんやりまきたばこ巻煙草をふかしながら、大川おおかわの向うに人となった二十年

前の幸福を夢みつづけた。……

この数篇の小品しょうひんは一本の巻煙草の煙となる間に、続々と保吉の心をかすめた追憶の二三を記したものである。

二 道の上の秘密

保吉やすきちの四歳しさいの時である。彼は鶴つると云う女中と一しよに大溝の往来へ通りかかった。黒ぐろと湛たたえた大溝おおどぶの向うは後のちに両りょうご国の停車場ていしやばになった、名高い御竹倉おたけぐらの竹藪たけやぶである。本所ほんじよななふしぎ七不思議の一つに当る狸たぬきの莫迦ばか囉子ばやしと云うものはこの藪の中から聞えるらしい。少くとも保吉は誰に聞いたのか、狸の莫迦囉子の

聞えるのは勿論、おいてき堀や片葉かたはの葭よしも御竹倉にあるものと確信していた。が、今はこの気味の悪い藪も狸などはどこかへ逐おい払ったように、日の光の澄すんだ風の中に黄ばんだ竹の秀ほをそよがせている。

「坊ちゃん、これを御存知ですか？」

つうや（保吉は彼女をこう呼んでいた）は彼を顧みながら、人通りの少い道の上を指ゆびさした。土つちほこり埃の乾いた道の上にはかなり太い線が一すじ、薄うすと向うへ走っている。保吉は前にも道の上にごうごう線を見たような気がした。しかし今もその時のように何かと云うことはわからなかった。

「何でしょう？ 坊ちゃん、考えて御覧なさい。」

これはつうやの常套手段である。彼女は何を尋ねても、素直なおに教えたと言うことはない。必ず一度は厳格げんかくに「考えて御覧なさい」を繰り返すのである。嚴格に——けれどもつうやは母のように年をとっていた訣わけでもなんでもない。やつと十五か十六になった、小さい泣黒子なきほくろのある小娘こむすめである。もとより彼女のこう云つたのは少しでも保吉の教育に力を添そえたいと思つたのである。彼もつうやの親切には感謝したいと思つている。が、彼女もこの言葉の意味をもつとほんとうに知つていたとすれば、きつと昔ほど執拗しつように何にでも「考えて御覧なさい」を繰り返す愚ぐだけは免まぬれたであろう。保吉は爾来じらい三十年間、いろいろの問題を考えて見た。しかし何もわからないことはあの賢けんいつうやと一しよ

に大溝の往来を歩いた時と少しも変つてはいないのである。……

「ほら、こつちにももう一つあるでしょう？　ねえ、坊ちゃん、考えて御覧なさい。このすじは一体何でしょう？」

つうやは前のように道の上を指ゆびさした。なるほど同じくらい太い線が三尺ばかりの距離を置いたまま、土埃つちほこりの道を走っている。

保吉は厳肅に考えて見た後のち、とうとうその答を發明した。

「どこかの子がつけたんだろう、棒か何か持つて来て？」

「それでも二本並んでいるでしょう？」

「だつて二人でふたりつけりや二本になるもの。」

つうやはにやにや笑いながら、「いいえ」と云う代りに首を振った。保吉は勿論不平だった。しかし彼女は全知である。云わば

Dalphiの巫女^{みこ}である。道の上の秘密^{ひみつ}もとうの昔に看破^{かんぱ}しているのに違いない。保吉はだんだん不平の代りにこの二すじ^{ふた}の線に対する驚異の情を感じ出した。

「じゃ何さ、このすじは？」

「何でしょう？ ほら、ずっと向うまで同じように二すじ並んでいるでしょう？」

実際つうやの云う通り、一すじの線のうねっている時には、向うに横たわったもう一すじの線もちやんと同じようにうねっている。のみならずこの二すじの線は薄白い道のつづいた向うへ、永遠そのもののように通じている。これは一体何のために誰のつけた印^{しるし}であろう？ 保吉は幻燈^{げんとう}の中に映る蒙古^{もうこ}の大沙漠^{だいさばく}を思い

出した。二すじの線はその大沙漠にもやはり細ぼそとつづいてい
る。……………

「よう、つうや、何だつて云えば？」

「まあ、考えて御覧なさい。何か二つ揃そろっているものですから。

——何でしょう、二つ揃そろっているものは？」

つうやもあらゆる巫女のように漠然と暗示を与えるだけである。

保吉はいよいよ熱心に箸はしとか手袋とか太鼓たいこの棒とか二つあるもの

を並べ出した。が、彼女はどの筈はずにも容易に満足を表わさない。

ただ妙に微笑したぎり、不相あいかわらず変「いいえ」を繰り返している。

「よう、教えておくれよう。ようつてば。つうや。莫ばか迦つうやめ

！」

保吉はとうとう癩癩かんしゃくを起した。父さえ彼の癩癩には滅多めったに戦たたかを挑いかんだことはない。それはずっと守もりをつづけたつうやもまた重々じゆうじゆう承知しているが、彼女はやつとおごそかに道の上の秘密を説明した。

「これは車の輪の跡あとです。」

これは車の輪の跡あとです！ 保吉は呆氣あつけにとられたまま、土つちほこ

埃りの中に断続した二すじの線を見まもった。同時に大沙漠の空想などは蜃気楼しんきろうのように消滅した。今はただ泥だらけの荷車が一台、寂しい彼の心の中うちにおのずから車輪をまわしている。……

保吉は未だいまにこの時受けた、大きい教訓を服膺ふくようしている。三十年來考えて見ても、何なに一つ碌ろくにわからないのはむしろ一生の幸

福かも知れない。

三 死

これもその頃の話である。晩酌ばんしやくの膳ぜんに向つた父は六兵衛ろくべえの盞さかずきを手にしたまま、何かの拍子にこう云つた。

「とうとうお目出度めでたくなつたそうだな、ほら、あの槇まき町ちようの二にげん弦琴きんの師匠ししやうも……」

ランプの光は鮮あざやかに黒塗りの膳ぜんの上を照らしている。こう云う時の膳の上ほど、美しい色彩あふに溢れたものはない。保吉やすきちは未だいまに食物しよくもつの色彩からすみ—— 脯すかきだの焼海苔やきのりだの酢蠣すかきだの辣らつき薑ようだ

のの色彩を愛している。もつとも当時愛したのはそれほど品の好い色彩ではない。むしろ悪どい刺戟あく しげきに富んだ、生なまなまましい色彩ばかりである。彼はその晩も膳ぜんの前に、一掴ひとつかみの海髪うごを枕にしためじの刺身さしみを見守っていた。すると微醺びくんを帯びた父は彼の芸術的感興をも物質的欲望と解釈したのであろう。象牙ぞうげの箸はしをとり上げたと思うと、わざと彼の鼻の上へ醤油しょうゆの匂においのする刺身さしみを出した。彼は勿論一口に食った。それから感謝の意を表するため、こう父へ話しかけた。

「さつきはよそのお師匠さん、今度は僕がお目出度なつた！」

父は勿論、母や伯母も一時にどつと笑い出した。が、必ずしもその笑いは機智きちに富んだ彼の答を了解したためばかりでもないよ

うである。この疑問は彼の自尊心に多少の不快を感じさせた。けれども父を笑わせたのはとにかくおおてがら大手柄には違いない。かつまた家かちゆう中を陽気にしたのもそれ自身甚だ愉快である。保吉はたちまち父と一しよに出来るだけ大声に笑い出した。

すると笑い声の静まった後のち、父はまだ微笑を浮べたまま、大きい手に保吉の頸くびすじをたたいた。

「お目出度なると云うことはね、死んでしまふと云うことだよ。」
あらゆる答は鋤すきのように問の根を断たつてしまふものではない。

むしろ古い問の代りに新らしい問を芽ぐませる木鋏きばさみの役にしか立たぬものである。三十年前ぜんの保吉も三十年後ごの保吉のように、やつと答を得たと思うと、今度はそのまた答の中に新しい問を發

見した。

「死んでしまつて、どうすること？」

「死んでしまつてと云うことはね、ほら、お前は蟻ありを殺すだろう。

……」

父は氣の毒にも丹たんねん念ねんに死と云うものを説明し出した。が、父の説明も少年の論理を固守こしゆする彼には少しも満足を与えなかつた。なるほど彼に殺された蟻の走らないことだけは確かである。けれどもあれは死んだのではない。ただ彼に殺されたのである。死んだ蟻と云う以上は格別彼に殺されずとも、じつと走らずにいる蟻でなければならぬ。そう云う蟻には石燈籠いしどうろうの下や冬青もちの木の根もとにも出合つた覚えはない。しかし父はどう云う訣わけか、全然こ

の差別を無視している。……

「殺された蟻は死んでしまったのさ。」

「殺されたのは殺されただけじゃないの？」

「殺されたのも死んだのも同じことさ。」

「だって殺されたのは殺されたって云うもの。」

「云つても何でも同じことなんだよ。」

「違う。違う。殺されたのと死んだのとは同じじゃない。」

「莫迦ぼか、何と云うわからないやつだ。」

父に叱しかられた保吉の泣き出してしまったのは勿論もちろんである。が、

いかに叱しかられたにしろ、わからないことのわかる道理はない。彼はその後数箇月ごの間、ちようどひとかどの哲学者のように死と云

う問題を考えつづけた。死は不可解そのものである。殺された蟻は死んだ蟻ではない。それにも関らず死んだ蟻である。このくらい秘密の魅力みりよくに富んだ、掴つかえ所のない問題はない。保吉は死を考へる度に、ある日回向院えこういんの境内けいだいに見かけた二匹の犬を思い出した。あの犬は入り日の光の中に反対の方角へ顔を向けたまま、一匹のようにじつとしていた。のみならず妙に嚴げん肅しゆくだった。死と云うものもあの二匹の犬と何か似た所を持っているのかも知れない。……

するとある火ともし頃である。保吉は役所から帰った父と、薄暗い風呂ふろにはいつていた。はいつていたとは云うものの、体などを洗っていたのではない。ただ胸ほどある据すえ風呂の中に恐る恐

る立つたなり、白い三角帆さんかくほを張つた帆前船ほまえせんの処女航海をさせ
 ていたのである。そこへ客か何か来たのであろう、鶴つるよりも年上
 の女中が一人、湯気ゆげの立ちこめた硝子障子ガラスしょうじをあけると、石鯨せつけん
 だらけになつていた父へ旦那様だんなさま何とかと声をかけた。父は海かいめ
 綿めんを使つたまま、「よし、今行く」と返事をした。それからま
 た保吉へ顔を見せながら、「お前はまだはいつてお出いで。今お母さ
 んがはいるから」と云つた。勿論父のいないことは格別帆前船の
 処女航海に差支さしつかえを生ずる次第でもない。保吉はちよつと父を
 見たぎり、「うん」と素直すなおに返事をした。

父は体を拭いてしまうと、濡れ手拭を肩にかけながら、「どつ
 こいしよ」と太い腰を起した。保吉はそれでも頓着せず帆前船

の三角帆を直していた。が、硝子障子のあいた音にもう一度ふと目を挙げると、父はちようど湯気ゆげの中に裸はだかの背中を見せたまま、風呂場の向うへ出る所だった。父の髪かみはまだ白わけい訣ではない。腰も若いもののようにまっ直すぐである。しかしそう云う後ろ姿はなぜか四歳しせいの保吉の心にしみじみと寂しさを感あじさせた。「お父さん」——瞬間帆前船を忘れた彼は思わずそう呼びかけようとした。けれども二度目の硝子戸の音は静かに父の姿を隠してしまった。あとにはただ湯にの匂においに満ちた薄うす明あかりの広ひろがっているばかりである。

保吉はひっそりした据え風呂の中に茫然と大きい目を開ひらいた。同時に従来不可解だった死と云うものを発見した。——死とはつ

まり父の姿の永久に消えてしまうことである！

四海

保吉やすきちの海を知ったのは五歳か六歳の頃である。もつとも海とは云うものの、万里ばんりの大洋を知ったのではない。ただ大森おおもりの海岸に狭苦せまくるしい東京湾とうきょうわんを知ったのである。しかし狭苦しい東京湾も当時の保吉には驚異だった。奈良朝の歌人は海に寄せる恋を「大船おおふねの香取かとりの海いかりに碇いかりおろしいかなる人かもの思わざらん」と歌った。保吉は勿論恋も知らず、万葉集の歌などと云うものはなおさら一つも知らなかった。が、日の光りに煙けむった海の何か妙

にももの悲しい神秘を感じさせたのは事実である。彼は海へ張り出したよしずば葭簾張りの茶屋の手すりにいつまでも海を眺めつづけた。海は白じろとかがや赫いた帆かけ船をなんそう何艘も浮かべている。長い煙を空へ引いた二本マストの汽船も浮かべている。翼の長いいちぐんかもめ一群の鴉はちようど猫のように啼きかわしながら、海面を斜めに飛んで行った。あの船や鴉はどこから来、どこへ行ってしまうのであろう？ 海はただいくえ幾重かの海苔粗朶のりそだの向うに青あおと煙っているばかりである。……

けれども海の不可思議を一層あざや鮮かに感じたのは裸はだかになった父やおじ叔父ととおあさ遠浅なぎさの渚へ下りた時である。保吉は初め砂の上へ静かに寄せて来るさざ波を怖れた。が、それは父や叔父と海の中へはい

りかけたほんの二三分の感情だった。その後の彼はさざ波は勿論、あらゆる海の幸を享樂した。茶屋の手すりに眺めていた海はどこか見知らぬ顔のように、珍らしいと同時に無氣味だった。——しかし干潟ひがたに立つて見る海は大きい玩具箱おもちゃばこと同じことである。玩具箱！ 彼は實際神のように海と云う世界を玩具にした。蟹かにや寄や生貝どかりは眩まばゆい干潟ひがたを右往左往うおうざおうに歩いている。浪は今彼の前へ一ふさの海草を運んで来た。あの喇叭らっぱに似ているのもやはり法螺貝ほらがいと云うのであろうか？ この砂の中に隠れているのは浅蜷あさりと云う貝に違いない。……

保吉の享樂は壮大だった。けれどもこう云う享樂の中にも多少の寂しさのなかった訣わけではない。彼は従来海の色を青いものと信

じていた。両国の「大平だいへい」に売っている月耕げっこうや年方としかたの錦にしき
 絵えをはじめ、当時流行の石版画せきばんえの海はいずれも同じようにま
 つ青さおだった。殊に縁日えんにちの「からくり」の見せる黄海こうかいの海戦の
 光景などは黄海と云うのにも関かかわらず、毒々しいほど青い浪なみに白い
 浪がしらを躍らせていた。しかし目前の海の色は——なるほど目
 前の海の色も沖だけは青あおと煙けむっている。が、渚なぎさに近い海は少
 しも青い色を帯びていない。正にぬかるみのたまり水と選ぶ所ところの
 ない泥色どろいろをしている。いや、ぬかるみのたまり水よりも一層鮮あざや
 かな代赭色たいしゃいろをしている。彼はこの代赭色の海に予期を裏切られ
 た寂しさを感じた。しかしまた同時に勇敢にも残酷ざんこくな現実を承
 認した。海を青いと考えるのは沖だけ見た大人おとなの誤りである。こ

れは誰でも彼のように海水浴をしさえすれば、異存のない真理に
違いない。海は実は代赭色をしている。バケツの錆さびに似た代赭色
をしている。

三十年前の保吉の態度は三十年後の保吉にもそのままあてはま嵌る
態度である。代赭色の海を承認するのは一刻も早いのに越したこ
とはない。かつまたこの代赭色の海を青い海に変えようとするの
は所詮しよせん徒勞とろうに畢おわるだけである。それよりも代赭色の海の渚なぎさに美
しい貝を発見しよう。海もそのうちには沖のように一面に青あお
となるかも知れない。が、将来あこがにれるよりもむしろ現在に安住
しよう。——保吉は予言者的精神に富んだ二三の友人を尊敬しな
がら、しかもなお心の一番底には不相あいかわ変らひずひとりこう思っている。

大森の海から帰った後、母はどこかへ行つた歸りに「日本にほんむかし

昔ばなし噺」の中にある「浦島太郎」を買つて来てくれた。こう云

うお伽とぎばなし噺ばなしを読んで貰もらうことの楽しみだつたのは勿論である。

が、彼はそのほかにももう一つ楽しみを持ち合せていた。それは

あり合せの水絵具に一々挿さしえ絵いろどを彩ることだつた。彼はこの「浦島

太郎」にも早速彩色を加えることにした。「浦島太郎」は一冊の

中うちに十とおばかりの挿絵を含んでいる。彼はまず浦島太郎の竜宮りゆうぐう

を去るの図いろどを彩りはじめた。竜宮は緑の屋根瓦に赤い柱のある宮

殿である。乙姫おとひめは——彼はちよつと考えた後のち、乙姫もやはり衣

裳だけは一面に赤い色を塗ることにした。浦島太郎は考えずとも

好いい、漁夫の着物は濃い藍あいいろ色、腰こし蓑みのは薄きい黄色である。ただ

細い釣竿つりざおにずっと黄色をなするのは存ぞんが外がい彼にはむずかしかつた。蓑みのがめ亀も毛だけを緑に塗るのは中なかなか々々なまやさしい仕事ではない。最後に海は代赭色である。バケツの錆さびに似た代赭色である。——保吉はこう云う色彩の調和に芸術家らしい満足を感じた。殊ことごとに乙姫おとひめや浦島太郎うらしまたろうの顔へ薄赤い色を加えたのは頗すこぶる生動せいどうの趣おもむきでも伝えたもののように信じていた。

保吉は 々母のところへ彼の作品を見せに行つた。何か縫ぬいものをしていた母は老眼鏡の額ひたいご越こしに挿絵の彩色へ目を移した。彼は当然母の口から褒ほめ言葉の出るのを予期していた。しかし母はこの彩色にも彼ほど感心しないらしかつた。

「海の色は可笑おかしいねえ。なぜ青い色に塗らなかつたの？」

「だって海はこう云う色なんだもの。」

「代赭色たいしやいろの海なんぞあるものかね。」

「大森の海は代赭色じゃないの？」

「大森の海だってまっ青さおだあね。」

「ううん、ちようどこんな色をしていた。」

母は彼の強情ごうじようさ加減に驚嘆を交えた微笑びしようを洩もらした。が、

どんなに説明しても、——いや、癩癩かんしやくを起して彼の「浦島太

郎」を引き裂いた後あとさえ、この疑う余地のない代赭色の海だけは

信じなかった。……「海」の話はこれだけである。もつとも今こんに

日の保吉は話の体裁ていさいを整えるために、もつと小説の結末らし

い結末をつけることも困難ではない。たとえば話を終る前に、こ

う云うすうぎよう数行をつけ加えるのである。——「保吉は母との問答の中にもう一つ重大な発見をした。それは誰も代赭色の海には、——人生に横わる代赭色の海にも目をつぶり易いと云うことである。」

けれどもこれは事実ではない。のみならず満潮は大森の海にも青い色の浪なみを立たせている。すると現実とは代赭色の海か、それともまた青い色の海か？ 所詮しよせんは我々のリアリズムも甚あてだ当にならぬと云うほかはない。かたがた保吉は前のような無技巧に話を終ることにした。が、話の体裁ていさいは？——芸術は諸君の云うように何よりもまず内容である。形容などはどうでも差支えない。

五 幻燈

「このランプへこう火をつけて頂きます。」

おもちゃや

玩具屋の主人は金属製のランプへ黄色いマッチの火をともし

た。それから幻燈げんとうの後ろの戸をあけ、そつとそのランプを器械

の中へ移した。七歳しちさいの保吉やすきちは息もつかずに、テーブルの前へ

及び腰になつた主人の手もとを眺めている。綺麗きれいに髪を左から分

けた、妙に色の蒼白い主人の手もとを眺めている。時間はやつと

三時頃であろう。玩具屋の外の硝子戸ガラスは一ぱいに当つた日の光り

の中に絶え間のない人通りを映うつしている。が、玩具屋の店の中は

——殊にこの玩具の空箱あきばこなどを無造作むぞうさに積み上げた店の隅は日

の暮の薄暗さと変りはない。保吉はここへ来た時に何か気味悪さに近いものを感じた。しかし今は幻燈に——幻燈を映して見せる主人にあらゆる感情を忘れている。いや、彼の後ろに立った父の存在さえ忘れていいる。

「ランプを入れて頂きますと、あちらへああ月が出ますから、——」

やっと腰を起した主人は保吉と云うよりもむしろ父へ向うの白^{らかべ}壁を指し示した。幻燈はその白壁の上へちようど差^{さしわた}渡し三尺ばかりの光りの円を描^{えが}いている。柔かに黄ばんだ光りの円はなるほど月に似ているかも知れない。が、白壁の蜘蛛^{くも}の巣^{ほこり}や埃もそこだけはありありと目に見えている。

「こちらへこう画えをさすのですな。」

かたりと云う音の聞えたと思うと、光りの円はいつのまにかぼんやりと何か映している。保吉は金属の熱する匂においに一層好奇心を刺戟しげきされながら、じつとその何かへ目を注いだ。何か、——まだそこに映ったものは風景か人物かも判然しない。ただわずかに見分けられるのははかない石鹼しゃぼんだま玉たまに似た色彩である。いや、色彩の似たばかりではない。この白壁に映っているのはそれ自身大きい石鹼玉である。夢のようにどこからか漂ただよって来た薄明りの中の石鹼玉である。

「あのぼんやりしているのはレンズのピントを合せさえすれば——この前すくにあるレンズですな。——直すくに御覽の通りはつきりなり

ます。」

主人はもう一度及び腰になった。と同時に石鹼玉は見る見る一枚の風景画に変わった。もつとも日本の風景画ではない。水路の両側に家々の聳^{そび}えたどこか西洋の風景画である。時刻はもう日の暮に近い頃であろう。三日月^{みかづき}は右手の家々の空にかすかに光りを放っている。その三日月も、家々も、家々の窓の薔薇^{ばら}の花も、ひっそりと湛^{たた}えた水の上へ鮮^{あざや}かに影を落している。人影は勿論、見渡したところ鷗^{かもめ}一羽浮んでいない。水はただ突^{つき}当^{あた}りの橋の下へまっ直に一すじつづいてる。

「イタリヤのベニスの風景でございます。」

三十年後の保吉にヴェネチアの魅力を教えたのはダンヌンチオ

の小説である。けれども当時の保吉はこの家々だの水路だのにただたよりのない寂しさを感じた。彼の愛する風景は大きい丹塗りの観音堂かんのんどうの前に無数の鳩はとの飛ぶ浅草あさくさである。あるいはまた高い時計台の下に鉄道馬車の通る銀座である。それらの風景に比べると、この家々だの水路だのは何と云う寂しさに満ちているのであろう。鉄道馬車や鳩は見えなくても好い。せめては向うの橋の上に一列の汽車でも通つていたら、——ちようどう思つた途端とたんである。大きいリボンをした少女が一人、右手に並んだ窓の一つから突然小さい顔を出した。どの窓かははつきり覚えていない。しかし大体三日月の下の窓だったことだけは確かである。少女は顔を出したと思うと、さらにその顔をこちらへ向けた。それから――

——遠目にも愛くるしい顔に疑う余地のない頬笑みほほえを浮かべた？

が、それは掛け値かのない一二秒の間の出来ごとである。思わず

「おや」と目を見はった時には、少女はもういつのまにか窓の中

へ姿を隠したのであろう。窓はどの窓も同じように人気ひとけのない窓

かけを垂たらしている。……

「さあ、もう映うつしかたはわかつたろう？」

父の言葉は茫然とした彼を現実の世界へ呼び戻した。父は葉巻

を啣くわえたまま、退たい屈くつそうに後ろに佇たんでいる。玩具屋おもちゃやの外の

往来も不相あいか変かわらず人通りを絶たないらしい。主人も——綺麗に髪を

分けた主人は小手調こてしらべをすませた手品師てしなしのように、妙な蒼白ほおい頬

のあたりへ満足の微笑を漂わせている。保吉は急にこの幻燈を一

刻も早く彼の部屋へ持つて帰りたいと思ひ出した。……

保吉はその晩父と一しよに蠟ろうを引いた布の上へ、もう一度ヴェネチアの風景を映した。中ちゆうくう空の三日月、両側の家々、家々の窓の薔薇ばらの花を映した一すじの水路の水の光り、——それは皆前に見た通りである。が、あの愛くるしい少女だけはどうしたのか今度は顔を出さない。窓と云う窓はいつまで待っても、だらりと下つた窓かけのうしろ後に家々の秘密を封じている。保吉はどうとう待ち遠しさに堪えかね、ランプの具合などを気にしていた父へたんが歎願するようんに話しかけた。

「あの女の子はどうして出ないの？」

「女の子？ どこかに女の子がいるのかい？」

父は保吉の問の意味さえ、はつきりわからない様子である。

「ううん、いはしないけれども、顔だけ窓から出したじやないの？」

「いつさ？」

「玩具屋の壁へ映した時に。」

「あの時も女の子なんぞは出やしないさ。」

「だって顔を出したのが見えたんだもの。」

「何を云っている？」

父は何と思ったか保吉の額へ手のひらをやった。それから急に保吉にもつけ景気とわかる大声を出した。

「さあ、今度は何を映そう？」

けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチアの風景を眺めつづけ
た。窓は薄明るい水路の水に静かな窓かけを映している。しかし
いつかはどこかの窓から、大きいリボンをした少女が一人、突然
顔を出さぬものでもない。——彼はこう考えると、名状の出来ぬ
懐^{なつか}しさを感じた。同時に従来知らなかつたある嬉しい悲しさをも
感じた。あの画^えの幻燈の中にちらりと顔を出した少女は實際何か
超^{ちようしぜん}自然の霊が彼の目に姿を現わしたのであるか？ あるいは
また少年に起り易い幻^{げんかく}覚の一種に過ぎなかつたのであろうか？
それは勿論彼自身にも解決出来ないのに違いない。が、とにかく
保吉は三十年後の今^{こんにち}日さえ、しみじみ塵^{じんろう}勞に疲れた時には
この永久に帰つて来ないヴェネチアの少女を思い出している、ち

ようど何年も顔をみない初恋の女人にょにんでも思い出すように。

六 お母さん

八歳くさいか九歳の時か、とにかくどちらかの秋である。陸軍大将の川島かわしまは回向院えこういんの濡れ仏ぬぼとけの石壇いしだんの前に佇たたずみながら、味みかたの軍隊けんえつを検閲けんえつした。もつとも軍隊とは云うものの、味みかたは保やすき吉ちとも四人ちしかいない。それも金きん 釦ボタンの制服きんぽたんを着た保吉一人を例外ちに、あとはことごとく紺飛白こんがすりや目めくら縞しまの筒袖つつそでを着ているのである。

これは勿論国技館の影の境内けいだいに落ちる回向院ではない。まだ

のわき野分の朝などにはねずみこぞう鼠小僧の墓のあたりにもいちようおちば銀杏落葉の山の出
 来るふたむかしまえ一昔前の回向院である。妙にひな鄙びた当時の景色——江戸
 と云うよりも江戸のはずれのほんじよ本所と云う当時の景色はどうの昔
 に消え去ってしまった。しかしただはと鳩だけは同じことである。い
 や、鳩も違っているかも知れない。その日も濡れ仏の石壇のまわ
 りはほとんど鳩で一ぱいだった。が、どの鳩もこんにち今日のように小
ぎれい綺麗に見えはしなかつたらしい。「門前のどぼと土鳩を友やしきみう柶売り」
 ——こう云うてんぼう天保の俳人の作は必ずしも回向院のしきみう柶売りをう
 たったものとは限らないであろう。それとも保吉はこの句さえ見
 れば、いつも濡れ仏の石壇のまわりにごみごみ群がっていた鳩を、
 ——のど喉の奥にこもる声に薄日の光りをふる震わせていた鳩を思い出さ

ずにはいられないのである。

鑢やすりや屋の子の川島は悠々と検閲を終った後のち、目くら縞の懐ろからナイフだのパチンコだのゴム鞆まりだのと一しよに一束ひとたばの画札えふだを取り出した。これは駄菓子屋だがしやに売っている行軍将棋こうぐんしょうぎの画札である。川島は彼等に一枚ずつその画札を渡しながら、四人の部下を任命（？）した。ここにその任命を公表すれば、桶屋おけやの子の平ひ松らまつは陸軍少将、巡查の子の田宮たみやは陸軍大尉、小間物屋の子の小栗くりはただの工兵こうへい、堀川保吉ほりかわやすきちは地雷火じらいかである。地雷火は悪い役ではない。ただ工兵にさえ出合わなければ、大将をも俘とりこに出来る役である。保吉は勿論もちろん得意だった。が、円まるまると肥ふとった小栗は任命の終るか終らないのに、工兵になる不平を訴え出した。

「工兵じやつまらないなあ。よう、川島さん。あたかも地雷火にしておくれよ、よう。」

「お前はいつだつて俘になるじやないか？」

川島は真顔まがおにたしなめた。けれども小栗はまっ赤になりながら、少しも怯ひるまずに云い返した。

「嘘をついていらあ。この前に大将とりにを俘にしたのだつてあたじやないか？」

「そうか？　じゃこの次には大尉にしてやる。」

川島はにやりと笑つたと思うと、たちまち小栗を懐かい柔じゆうした。

保吉は未いまだにこの少年の悪智慧わるぢえの鋭さに驚いている。川島は小学校も終らないうちに、熱病のために死んでしまった。が、万一死な

ずにいる上、幸いにも教育を受けなかつたとすれば、少くとも今は年少気鋭の市会議員か何かになつていたはずである。……

「開戦！」

この時こう云う声を挙げたのは表門おもてもんの前に陣取つた、やはり四五人の敵軍である。敵軍はきようも弁護士の子の松本まつもとを大将しょうにしているらしい。紺飛白こんがすりの胸に赤シャツを出した、髪の毛を分けた松本は開戦あいずの合図あいずをするためか、高だかと学校帽をふりまわしている。

「開戦！」

画札えくだを握つた保吉は川島の号令のかかると共に、誰よりも先へえくだ 唸とっかん 喊かん した。同時にまた静かに群がつていた鳩おびただは夥はしい羽音はを立おと

てながら、大まわりに中ぞらへ舞い上った。それから——それからは未曾有の激戦である。硝煙は見る見る山をなし、敵の砲弾は雨のように彼等のまわりへ爆発した。しかし味かたは勇敢にじりじり敵陣へ肉薄した。もつとも敵の地雷火は凄まじい火柱をあげるが早いか、味かたの少将を粉微塵にした。が、敵軍も大佐を失い、その次にはまた保吉の恐れる唯一の工兵を失つてしまった。これを見た味かたは今までよりも一層猛烈に攻撃をつづけた。——と云うのは勿論事実ではない。ただ保吉の空想に映じた回向院の激戦の光景である。けれども彼は落葉だけ明るい、もの寂びた境内を駆けまわりながら、ありありと硝煙の匂を感じ、飛び違う砲火の閃きを感じた。いや、ある時は大地の底

に爆発の機会を待っている地雷火の心さえ感じたものである。こう云う澆刺はつらつとした空想は中学校へはいった後のち、いつのまにか彼を見離してしまった。今日こんにちの彼は戦いくさごつこの中に旅順港りよじゆんこうの激戦を見ないばかりではない、むしろ旅順港の激戦の中にも戦ごつこを見ているばかりである。しかし追憶ついおくは幸いにも少年時代へ彼を呼び返した。彼はまず何を措おいても、当時の空想を再びする無上の快樂を捉えなければならぬ。――

硝煙は見る見る山をなし、敵の砲弾は雨のように彼等のまわりへ爆発した。保吉はその中を一文いちもんじ字に敵の大將へ飛びかかった。敵の大將は身を躲かわすと、一散に陣地へ逃げこもうとした。保吉はそれへ追いがつた。と思うと石に躓つまずいたのか、仰向あおむけにそこへ

転ころんでしまった。同時にまた勇ましい空想も石しや鱈ぼん玉だまのように消えてしまった。もう彼は光榮に満ちた一瞬間前の地雷火ではない。顔は一面に鼻血にまみれ、ズボンの膝は大穴のあいた、帽子ぼうしも何もない少年である。彼はやっと立ち上ると、思わず大声に泣きはじめた。敵味方の少年はこの騒さわぎにせつかくの激戦も中止したまま、保吉のまわりへ集まったらしい。「やあ、負傷した」と云うものもある。「仰向けにおなりよ」と云うものもある。「おいらのせいじゃなあい」と云うものもある。が、保吉は痛みよりも名状の出来ぬ悲しさのために、二の腕に顔を隠したなり、いよいよ懸命に泣きつづけた。すると突然耳もとに嘲ちやうしやう笑しょうの声を挙げたのは陸軍大将の川島である。

「やあい、お母さんて泣いていやがる！」

川島の言葉はたちまちのうちに敵味方の言葉を笑い声に変じた。殊に大声に笑い出したのは地雷火になり損そこなつた小栗である。

「可笑おかしいな。お母さんて泣いていやがる！」

けれども保吉は泣いたにもせよ、「お母さん」などと云つた覚えはない。それを云つたように誣しいるのはいつもの川島の意地悪である。——こう思つた彼は悲しさにも増した口惜くやしさに一ぱいになつたまま、さらにまた震ふるえ泣きに泣きはじめた。しかしもう意気いき地じのない彼には誰一人好意を示すものはいない。のみならず彼等は口々に川島の言葉を真似まねしながら、ちりぢりにどこかへ駈かけ出して行つた。

「やあい、お母さんつて泣いていやがる！」

保吉は次第に遠ざかる彼等の声を憎み憎み、いつかまた彼の足もとへ下りた無数の鳩にも目をやらずに、永い間啜り泣きをやめなかつた。

保吉は爾来この「お母さん」を全然川島の発明した謔とばかり信じていた。ところがちようど三年以前、上海へ上陸すると

同時に、東京から持ち越したインフルエンザのためにある病院へはいることになった。熱は病院へはいった後も容易に彼を離れなかつた。彼は白い寝台の上に朦朧とした目を開いたまま、蒙古の春を運んで来る黄沙の凄じさを眺めたりしていた。するとある蒸暑い午後、小説を読んでいた看護婦は突然椅子を離れると、

寝台の側へ歩み寄りながら、不思議そうに彼の顔を覗きこんだ。

「あら、お目覚になつていらつしやるんですか？」

「どうして？」

「だって今お母さんつて仰おっしや有つたじやありませんか？」

保吉はこの言葉を聞くが早いか、回えこういん向院の境けいだい内を思い出し

た。川島もあるいは意地の悪い謔をついたのではなかつたかも知れない。

(大正十三年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>